

ティラピア

越冬管理

霞ヶ浦の水温も15℃以下になり、細いけすのティラピアも既にハウスに収容され、越冬の準備が完了していることと申します。

越冬施設は、以前に比べるとかなり充実してきていますが、これまでの調査で気付いた点を上げてみます。

越冬池では、種々の細菌病が発生していますが、湖か

ら越冬池への移動が遅れた場合には、これらの病気の発生が多いようです。

従って、遅くとも湖の水温が15℃以上の時期に移動を完了した方が好ましいです。また、越冬池に加熱施設がある場合には、越冬池移動後一週間程度20℃に加熱し、徐々に越冬水温に下げていくのが歩減りが少ないようです。

次に注水量ですが、注水量は、水温・水質を安定に保つという意味で重要であり、地下水が16℃以上ある場合には、加熱のための燃料費を注水量増加のための電気代に振り向けた方が得策と思われます。

いつれにしても、霞ヶ浦周辺の越冬施設においては、単に歩留り良く越冬管理するということに徹するべきでしょう。

越冬池における体重維持のための
日給飼量 (Kg/収容量 100Kg)

体重 (g) / 水温 (℃)	5	10	20	50	100	200
15	0.49	0.38	0.29	0.21	0.16	0.13
17	0.68	0.52	0.40	0.29	0.22	0.17
19	0.93	0.72	0.57	0.40	0.31	0.24

越冬中、特に体重100g以下の稚魚については給飼を行わないことによるヤセが著しく、一月に入っへい

死が多くなっています。このため、少なくとも上表に示した体重維持のための給飼は必要です。

越冬池では、酸素量が重要な条件となってくることはいうまでもありません。実験によると、酸素量が3~4ppm以上あれば、酸素障害に起因する被害は発生しないものと思われ、発生が、安全を見越して、5ppm以上ほしいものです。

池の曝気装置として、現在使用されているものの中では、水車が消費電力当りの酸素供給効率が最も良く、ブローア(通気)や水中ポンプによるジェット方式とは比較になりません。

茨内水試